

(d) 【海鳥沖合調査】



(d)【海鳥沖合調査】

1) 目的

北海道東部に位置する浜中町霧多布周辺ではエトピリカやケイマフリといった北方系の希少海鳥の保護活動が展開されているが、最も基本的な洋上における鳥類相やその季節変化は十分明らかにされておらず、ここ数年の当基金の活動によって臍げながら見えてきたに過ぎない。霧多布沖の海鳥、特にエトピリカやカンムリウミスズメ、アホウドリ類等の希少種の飛来状況や洋上分布を把握し、季節や経年での変化を比較することで海洋環境との関係を明らかにし、エトピリカ、ケイマフリについては陸上からの観察結果と合わせ、繁殖地復活のための基礎データとすることを目的とした。

2) 調査方法

調査は 2015 年 6～7 月に計 3 回実施した。調査地は北海道厚岸郡浜中町の海域で、同町霧多布港を出港して浜中湾を東進、約 5km 沖合のホカケ岩を經由してそこから 7km 程度東の北緯 43 度 05 分、東経 145 度 16 分付近で南へ変針し、約 30km 先の北緯 42 度 50 分、東経 145 度 19 分付近で西へ変針。12～13km 西方の北緯 42 度 50 分、東経 145 度 10 分付近で北へ変針し、霧多布岬東方海上を經由し霧多布港に戻る 5 時間半前後のルートを走行した（図 1）。

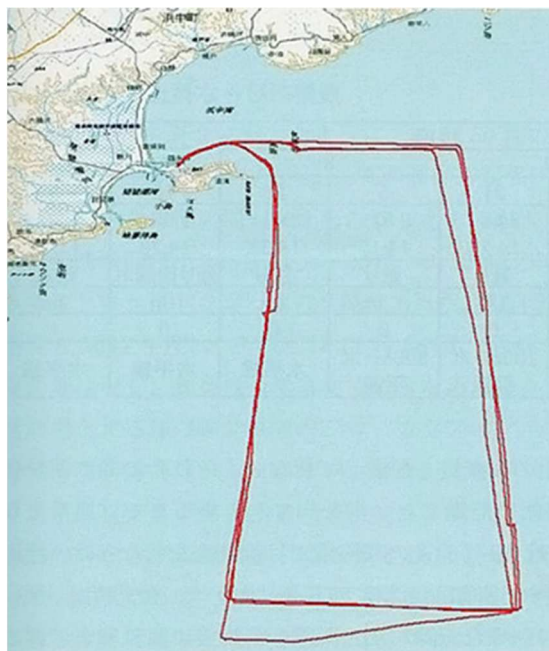


図 1. 2015 年度の調査ルート

表1. 調査日ごとの時間ならびに観察条件

年	2015			
月	6	7		
日	8	9	30	
時間	5:56-11:37	5:58-11:07	8:57-14:15	
天候	曇り	晴れ	曇り 霧	
波	0.5m	0.5m	0.5m	
風	0	1	1	
視程	水平線	水平線	100-500m	

各月の調査日、時間、気象条件を表1に示した。調査時間は日長や海況、他の漁との兼ね合い等で月によって異なるが、結果としてほとんどの調査が午前中から午後の早い時間にかけて行なわれた。

調査は、船の舳先の左右に各1名以上の調査員を配置して行ない、それらの間に記録係が入り、調査員が口頭で伝える情報を野帳に記録した。港を出

てから戻るまで、通常より低速（10ノット前後）で航行し、調査員は10倍前後の双眼鏡で目視調査を行なった。原則として片側約200m（両側400m）に出現する鳥類ならびに哺乳類について、発見時刻、種、数、行動（飛翔、海上、上陸等）、左右の別等を記録した。距離や角度等により種まで同定できない場合は、「ウミガラス sp.」や「ミズナギドリ類」等種より上位の分類群で記録した。また、岸壁から港の出入口までの漁港内はカモメ類やカラス類等、人間活動によって誘引された鳥が明らかに多いと考えられたため、種のみ記録し、個体数ほかは記録しなかった。出現した海鳥、海獣類は、可能な限り400mm望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS7D）で写真撮影を行ない、識別や羽衣の調査に役立てられるように心がけた。また、出港から帰港まで、GPS（Garmin 社製GPSmap62SJならびに同60CS）で位置情報を取得した。

3) 結果ならびに考察

(1) 出現した科ならびに種数

3回の調査で表2に示したように、14科31種の鳥類と11の不明カテゴリ（「黒色ミズナギドリ類」、「ヒレアシシギ spp.」等）の合計42項目が記録された。不明カテゴリは観察条件が悪いため種の同定に至らなかったものが大部分で、海鳥では未記録の種を含んでいる可能性は低い。陸鳥・洋上を主たる生活の場としない種（ドバト、アオサギ、アマツバメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハクセキレイ）を除いた海鳥の科ならびに種数は、9科25種であった。

海鳥のうち科ごとの種数ではウミスズメ科が9種と最大で、ミズナギドリ科の4種がそれに続き、それ以外の科はそれぞれ1～3種であった。海鳥の科ならびに種数が2014年度（11科38種）より少なかったのは、カモ科やカモメ科、アビ科などの種数が増加する秋期に調査を行っていないことによると思われる。

表2. 日別の鳥類の種またはカテゴリ別確認数						
	No.	科名	種名／月日	6	7	
				8	9	28
	1	ハト	ドバト	●		
	2	アビ	シロエリオオハム	15		
	3	アホウドリ	コアホウドリ	14	78	25
	4		クロアジアホウドリ	31	13	31
	5	ミズナギドリ	フルマカモメ	405	455	133
	6		オオミズナギドリ			115
	7		ハイイロミズナギドリ	23	2289	93
	8		ハシボソミズナギドリ	2	1	
	9	ウミツバメ	コシジロウミツバメ			9
	10	ウ	ヒメウ	8	3	4
	11		ウミウ	33	31	40
	12	サギ	アオサギ			●
	13	アマツバメ	アマツバメ	●		
	14	シギ	アカエリヒレアシシギ	4	149	373
	15		ハイイロヒレアシシギ	14	157	296
	16	カモメ	ミツユビカモメ	1		
	17		ウミネコ	85	188	27
	18		オオセグロカモメ	74	124	39
	19	トウゾクカモメ	クロトウゾクカモメ	1		
	20	ウミガラス	ハシブトウミガラス	21	9	
	21		ウミガラス	2	5	
	22		ケイマフリ	5		1
	23		ウミスズメ	34	8	
	24		カンムリウミスズメ	2	4	4
	25		エトロフウミスズメ	3		
	26		ウトウ	255	102	79
	27		ツノメドリ		2	1
	28		エトピリカ	1	1	
	29	カラス	ハシボソガラス	●		
	30		ハシブトガラス	1	1	
	31	セキレイ	ハクセキレイ		1	
	32	アビ	アビsp.	11		
	33	ミズナギドリ	ミズナギドリ類	3		
	34		黒色ミズナギドリ類	1		
	35	ウ	ウsp.	15	10	20
	36	シギ	シギ科の一種			2
	37		ヒレアシシギspp.		62	185
	38	カモメ	アジサシsp.		1	
	39	ウミスズメ	ウミスズメ類		1	
	40		ウミガラスsp.	5		1
	41		ウミスズメsp.			2
	42		不明	51		
			●は港内のみ			

(2) 優占種について

各調査での個体数上位 5 種の種名、個体数、相対優占度（海鳥全体の個体数に対してその種が占める割合）を表 3 に示した。優占種の上位 5 種は 6 月 8 日がフルマカモメ、ウトウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、不明、7 月 9 日がハイイロミズナギドリ、フルマカモメ、ウミネコ、ハイイロヒレアシシギ、アカエリヒレアシシギ、同 28 日がアカエリヒレアシシギ、ハイイロヒレアシシギ、ヒレアシシギ spp.、フルマカモメ、オオミズナギドリであった。すべての調査において優占種上位 5 種に入ったのはフルマカモメで、ウミネコが 7 月 28 日を除く前 2 回で、アカエリヒレアシシギ、ハイイロヒレアシシギが 7 月の 2 回の調査でそれぞれ優占種に入った。

前 2 回ではミズナギドリ科（大部分がフルマカモメとハイイロミズナギドリ）の占める割合が 38.4%（6 月 8 日）、74.3%（7 月 9 日）、アホウドリ科を含むミズナギドリ目の割合は前者で 42.4%、後者で 76.8%と高く、群集レベルではミズナギドリ目鳥類が著しく卓越する特徴があった。これは北海道太平洋側の夏期の海上鳥類相の特徴とも一致し、繁殖地が近海にあるカモメ類やウ類が本調査では多く記録されたため、海鳥群集におけるミズナギドリ目鳥類はむしろ過小評価されているといえる。7 月 28 日は前 2 回までとは大きく異なり、ヒレアシシギ 2 種（不明も含む）で全体の 57.7%を占めた。目レベルではこれらにカモメ類やウミスズメ類をくわえたチドリ目が 1009 羽（68.3%）と著しい卓越を示した。これは、集群性の強いヒレアシシギ類の渡りのピークと重なったためである。これらの群れは通常、長期滞在することなく南下してゆくので、同時期におけるチドリ目の割合は日や微妙な調査海域の違いによって大きく変動すると考えられる。なお、ヒレアシシギ類の大部分は 8 月後半以降によく見られる幼鳥ではなく、夏羽（近年では alternative plumage とも呼ぶ）を多く残す成鳥（写真 31、32）であった。

2014 年度の調査と比較して異なる点の一つに、6 月 8 日にシロエリオオハム、ミツユビ

表3. 調査日ごとの優占種とその個体数ならびに相対優占度			
順位 ／月 日	6	7	
	8	9	28
	種名		
	個体数(相対優占度)		
1	フルマカモメ 405(36.2%)	ハイイロミズナギドリ 2289(61.9%)	アカエリヒレアシシギ 373(25.2%)
2	ウトウ 255(22.8%)	フルマカモメ 455(12.3%)	ハイイロヒレアシシギ 296(20.0)
3	ウミネコ 85(7.6%)	ウミネコ 188(5.1%)	ヒレアシシギspp. 185(12.5%)
4	オオセグロカモメ 74(6.6%)	ハイイロヒレアシシギ 157(4.2%)	フルマカモメ 133(9.0%)
5	不明 51(4.6%)	アカエリヒレアシシギ 149(4.0%)	オオミズナギドリ 115(7.8%)

カモメ、ハシブトウミガラス、エトロフウミスズメなど、北海道より北に繁殖分布する寒流系の海鳥が比較的多く観察された点がある。同日の調査海域周辺の表面海水温は 7~8℃と低く、歯舞・色丹南方には平年よりも寒冷的な海域が存在した（図 2、3）ため、これら寒流系海鳥の春の渡りがまだ続いていたか、未成熟鳥あるいは非繁殖鳥が当海域に残留していたと思われる。

前年度と異なる点としては、フルマカモメの著しい卓越も挙げられる。6 月調査では海鳥全体の約 36%を占める最優占種で、7 月には海水温の上昇に伴ってハイイロミズナギドリの大群が北上して来たため優占度は低下したが、やはり 400 羽以上が出現した。くわえて特徴的なのは日本近海では稀な淡色型（写真 28）が、6 月 8 日 4 羽（本種全体の 1.0%）、7 月 9 日 20 羽（本種全体の 4.4%）と比較的多く出現したことにあった。通常、北海道近海では淡色型は全体の 1%にもはるかに満たない。今年多く出現した理由は不明であるが、表層海水温が 7~13℃と寒冷であったことにくわえ、特に 7 月 9 日には色丹島南方沖に平年差-2℃の冷水塊が存在する一方、平年差+2℃の暖水塊が厚岸・霧多布南方まで北上し、当海域周辺の水温勾配が急（図 4、5）で湧昇などが発生しやすく、冷水塊周辺から寒冷を好む淡色型を含む本種が多数飛来していた可能性がある。

この暖水塊は 6 月 8 日の時点で襟裳岬南東方の北緯 42° 付近まで北上しており、同日に例年であれば 7~9 月の高海水温期に多いクロアシアホウドリが、やや多く出現したのも暖水塊辺縁部とともに北上して来たためかもしれない。これまでの調査では 7 月以降に出現していたカンムリウミスズメ 2 羽が 6 月調査で記録されたのも、特筆すべき事項であろう。いずれも単独個体であり、非繁殖鳥か繁殖失敗個体が早めに北上したのかもしれないが、暖水塊の北上とも関係があるかもしれない。海鳥の洋上分布は餌生物の分布をはじめ、それを規定する海水温や海流、局地的な海底地形などに強く影響を受けるため、今後はそれらに関するデータの収集・蓄積や専門家と連携した解析が必要であろう。

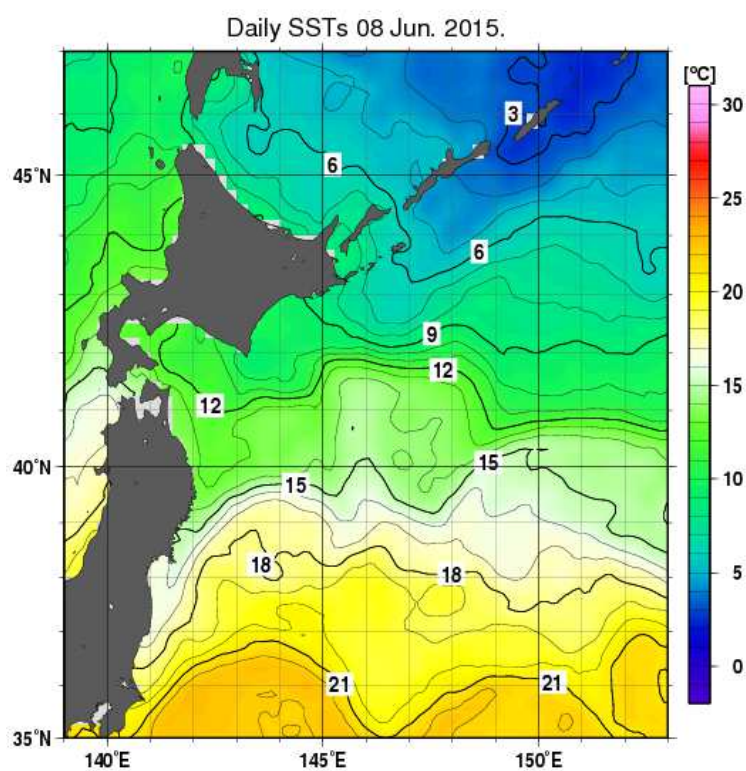


図 2. 2015 年 6 月 8 日の親潮海域の表面海水温（気象庁 HP より）

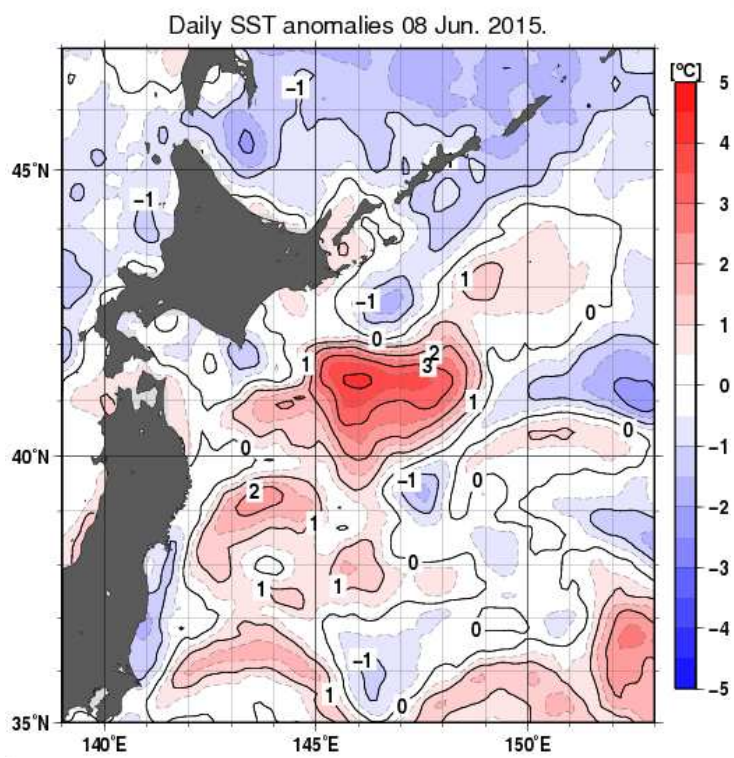


図 3. 2015 年 6 月 8 日の親潮海域の表面海水温の平年差（気象庁 HP より）

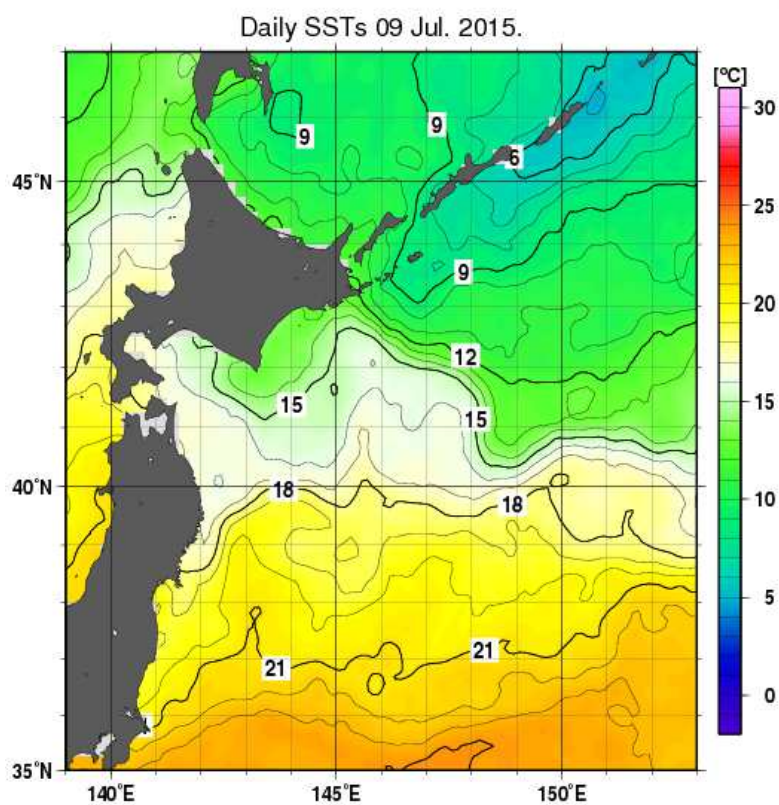


図 4. 2015 年 7 月 9 日の親潮海域の表面海水温（気象庁 HP より）

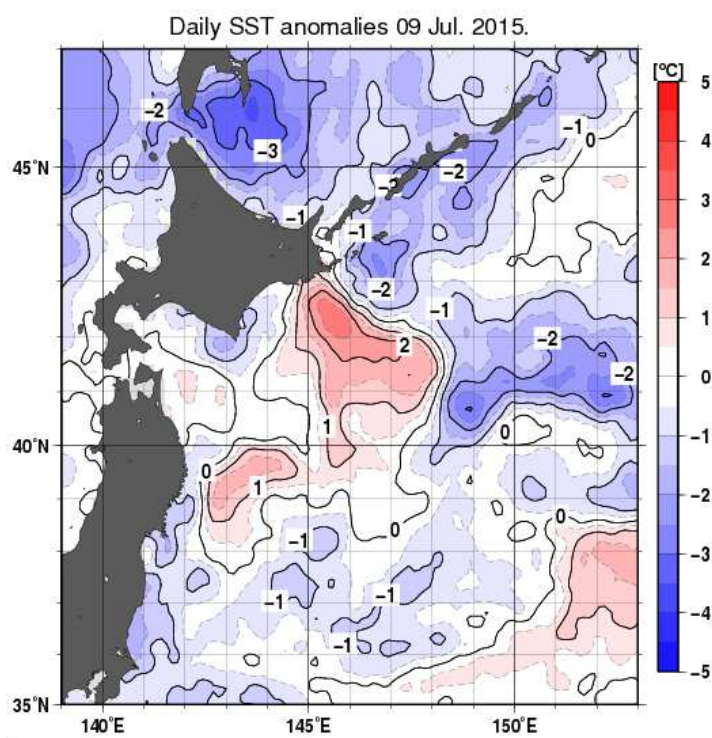


図 5. 2015 年 7 月 9 日の親潮海域の表面海水温の平年差（気象庁 HP より）

(3) 貴重種について

表4に示した通り、今年度の調査での記録種31種の1/3近くに当たる10種が環境省、北海道、国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストや天然記念物等に指定されている貴重種であった。10種はすべて海鳥であり、4種（コアホウドリ、クロアシアホウドリ、ハイイロミズナギドリ、カンムリウミスズメ）はIUCNのレッドリストに掲載されている、世界的に絶滅のおそれのある種であることは、霧多布海域が国際的にも海鳥にとって重要なエリアであることを示唆している。

ハイイロミズナギドリは夏の北太平洋において普通種であり、大西洋も含めた総個体数は2千万羽以上だが、過去75年間の減少率が大きく、繁殖地における移入哺乳類や外洋での混獲、長期的な気候変動が個体群動態に影響を及ぼしているため、IUCNは準絶滅危惧種に指定している。このような国際的な動向は、国内のレッドリストにも反映されるべきである。

アホウドリ類は環境省（クロアシアホウドリを除く）、IUCN双方のリストにおいて高いランクに位置付けされているが、北海道レッドデータブックには情報不足にすら登場しない。北海道の鳥としてのアホウドリ類が専門家も含め十分認識できていないと考えられ、アホウドリ類が人間と抱える軋轢の中には漁業での混獲やプラスチック・ゴミの誤飲等、非繁殖海域でのものも多いことを考えると、本調査の結果等を積極的に発信し、アホウドリ類採餌・休息域としての道東太平洋の重要性を強く訴える必要がある。

表4. 本調査で確認された貴重種とそのカテゴリ										
No.	種名	天然 記念 物	保存 法	環境省レッドリスト			道RDB		IUCNレッドリスト	
				絶滅 危惧 ⅠA類	絶滅 危惧 ⅠB類	絶滅 危惧 Ⅱ類	絶滅 危機 種	絶滅 危急 種	絶滅危 惧Ⅱ類	準絶滅 危惧
1	コアホウドリ				●					●
2	クロアシアホウドリ									●
3	オオミズナギドリ						●			
4	ハイイロミズナギドリ									●
5	ヒメウ				●					
6	ウミガラス		●	●			●			
7	ケイマフリ					●		●		
8	ウミスズメ			●				●		
9	カンムリウミスズメ	●				●			●	
10	エトピリカ		●	●			●			
		1	2	3	2	2	3	2	1	3
保存法: 種の保存法国内希少野生動物種										
道RDB: 北海道レッドデータブック										
IUCN: 国際自然保護連合										

(4) エトピリカについて

主な調査対象種であるエトピリカは以下の通り、6月8日と7月9日の調査で1羽ずつ、計2羽が出現した。7月28日には出現しなかった。

- ①6月8日 10時52分 成鳥1羽 ウトウ3、ウミガラス2と一緒に飛翔 北緯43° 03' 29.02" 東経 145° 11' 53.72" 水深20~40m 陸から5km以内 (写真5、6)
- ②7月9日 6時44分 成鳥1羽 海上 北緯43° 05' 27.27" 東経143° 15' 44.27" 水深20~40m 陸から7.5~10km (写真なし)

2回の調査で計45羽が出現した2014年7月と比べて、確認数は著しく少なかった。また、2014年の45羽はすべて1~2歳の若鳥であったが、本調査で確認された2羽はいずれも成鳥であった。2014年の当海域へのエトピリカの出現状況は、例年より多くの若い個体が沿岸域に分布していた点で、2011~13年とは傾向が大きく異なった(2014年度報告書)。2011~13年の出現状況は総じて、水深50m以深の外洋域に主として若鳥が数~10数羽程度現れるものであった。本調査の結果とはこれらとも異なっており、要約すると①**海域全体への飛来数自体が著しく少なく、②数少ない飛来は成鳥による沿岸域へのもので、③通常この時期に多く出現する沖合の若鳥がまったく確認されなかった、**の3点が昨年度までとの大きな違いであったといえる(表5ならびに6また図6ならびに7)。

6~7月の成鳥(またはそれに限りなく近い亜成鳥)の沿岸域への飛来は、アゼチの岬や霧多布岬など陸地からも観察されており、本調査の出現個体もそれらの一部であろう。

外洋域への若鳥の飛来がなかった理由は、本調査の結果だけでは不明である。考えられる可能性としては、昨夏、本来の分布域と考えられる千島列島方面から多数の若鳥が当海域へ出現したこととも関連し、昨年は千島列島周辺海域の餌条件が悪く、ヒナの成長や生残に影響を与えた点がある。また、沖合の若鳥は2歳鳥も含むため、昨夏やはり多く見られた衰弱した感じの1歳鳥が死亡もしくは移出し、当該年齢級の個体数が減少していた可能性も考えられる。いずれにしても当海域のデータだけでは判断しがたく、親潮域の広い範囲での調査と海洋学的情報の収集が必要といえる。エトピリカに限らず、海鳥や海獣は生涯の大半を海洋で過ごし、かつ広範囲を移動するため、非繁殖期を過ごすエリアも含めた広域な情報収集が個体群動態の把握には不可欠であるが、残念なことに日本においてこの分野の調査研究は進展していない。しかも、数少ない事例は市民や団体など民間の努力によるものであり、公的な努力をもっと注ぐべきである。また、領土問題にくわえ、無人島へのアプローチや滞在など超えなければならない多くのハードルが存在するが、千島列島を含む極東ロシアでの繁殖生態や個体群動態に関するモニタリングの実施とその継続が、北海道の海鳥・海獣を考えるに当たっては必要である。

沿岸域への成鳥の飛来は本年度も確認されたが、それらが小島や霧多布岬へ定期的に飛来し、繁殖するまでには、依然として至っていない。今後も陸上、海上双方からのモニタリングを継続し、沖合の若鳥が旧繁殖地へ飛来しない状況が続くのであれば、その要因の

解明や除去、あるいはデコイ、音声規模の強化、ヒナの人為的導入などによる積極的な誘致に取り組むべき時期に来ているのかもしれない。

表5. 本調査と2014年ならびに2011～13年の水深ごとのエトピリカ確認数.

水深(m)	確認数(%)		
	本調査 (N=2)	2014年 (N=45)	2011～13 年(N=49)
0-20			
20-40	2(100.0)	6(13.3)	1(2.1)
40-60		23(51.1)	20(42.6)
60-80		9(20.0)	14(29.8)
80-100		4(8.9)	4(8.5)
100-120			1(2.1)
120-140		2(4.4)	1(2.1)
140-160		1(2.2)	2(4.3)
160-180			
180-200			1(2.1)
200-300			1(2.1)
300-400			2(4.3)

* 2011～13年データはNPO法人エトピリカ基金による調査

表6. 本調査と2014年ならびに2011～13年の陸からの距離ごとのエトピリカ確認数.

陸からの 距離(km)	確認数(%)		
	本調査 (N=2)	2014年 (N=45)	2011～13 年(N=49)
0-5	1(50.0)		
5-10	1(50.0)	13(28.9)	2(4.3)
10-15		8(17.8)	8(17.0)
15-20		17(37.8)	20(42.6)
20-25		4(8.9)	5(10.6)
25-30			4(8.5)
30-35		2(4.4)	4(8.5)
35-40		1(2.2)	1(2.1)
40-45			3(6.4)

* 2011～13年データはNPO法人エトピリカ基金による調査

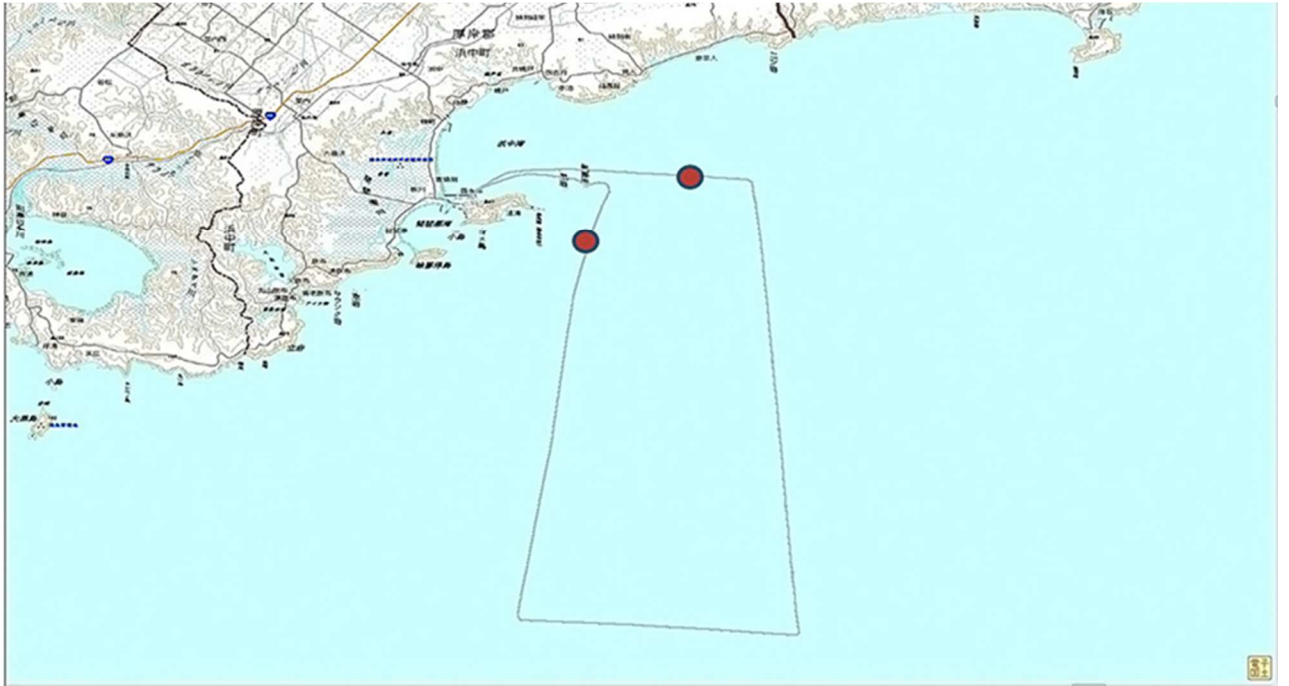


図 6. 2015 年 6 月 8 日（左）と 7 月 9 日の霧多布海域におけるエトピリカ出現位置

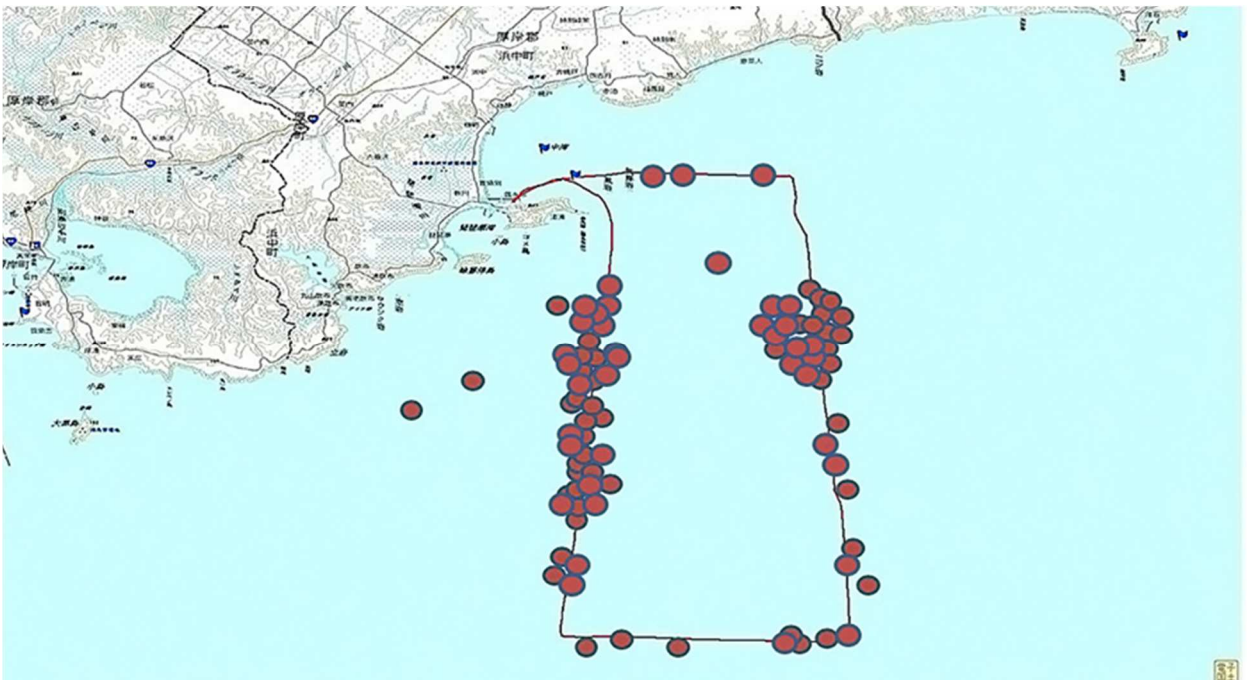


図 7. 2011～14 年の霧多布海域におけるエトピリカ出現位置

2011～13 年は NPO 法人エトピリカ基金、2014 年は当基金と環境省によるもの

(5) エトピリカ以外のウミスズメ科鳥類について

①ツノメドリ

エトピリカと同属のツノメドリが、7月9日に2羽、同28日に1羽が確認された。

①7月9日 7時25分 若鳥1羽 海上 北緯43° 00′ 31.82″ 東経145° 18′ 28.73″
水深40～50m 陸から15～20km (写真なし)

②7月9日 10時6分 若鳥1羽 海上 北緯42° 59′ 10.38″ 東経145° 10′ 46.57″
水深50～60m 陸から10～15km (写真なし)

③7月28日 10時2分 若鳥1羽 海上 北緯43° 03′ 59.47″ 東経145° 18′ 04.94″
水深40～50m 陸から10～15km (写真なし)

いずれも嘴の黄色や赤色が鈍く、顔の白色部が灰色みを帯びる第1回夏羽と思われる若鳥であった。昨年調査の6羽に比べると少なかったが、当海域ではもともと少ない鳥であり、2012年にのべ11羽が観察された一方、2011年は確認なし、2013年は1羽のみだった。確認位置の水深や陸からの距離は、著しく沿岸に偏った2014年を除いた傾向と類似し、水深50m前後、陸から10～20kmの範囲であった(表7ならびに8、図8ならびに9)。過去の結果からも、本種の若鳥はエトピリカよりやや沿岸に分布する傾向がある。北緯45度以北と繁殖地がエトピリカより北に位置するため、エトピリカほど昨年の海況の影響を受けていないのかもしれない。

表7. 本調査と2014年ならびに2011～13年の水深ごとのツノメドリ確認数.

水深(m)	確認数(%)		
	本調査 (N=3)	2014年 (N=6)	2011～13 年(N=12)
0-20			
20-40		4(66.7)	2(16.7)
40-60	3(100.0)	1(16.7)	7(58.3)
60-80		1(16.7)	2(16.7)
80-100			
100-120			
120-140			1(8.3)
140-160			
160-180			
180-200			
200-300			
300-400			

* 2011～14年データはNPO法人エトピリカ基金による調査

表8. 本調査と2014年ならびに2011～13年の陸からの距離ごとのツノメドリ確認数.

陸からの 距離(km)	確認数(%)		
	本調査 (N=3)	2014年 (N=6)	2011～13 年(N=12)
0-5		3(50.0)	1(8.3)
5-10			1(8.3)
10-15	2(66.7)		3(25.0)
15-20	1(33.3)	2(33.3)	4(33.3)
20-25			2(16.7)
25-30			
30-35		1(16.7)	1(8.3)
35-40			
40-45			

* 2011～14年データはNPO法人エトピリカ基金による調査

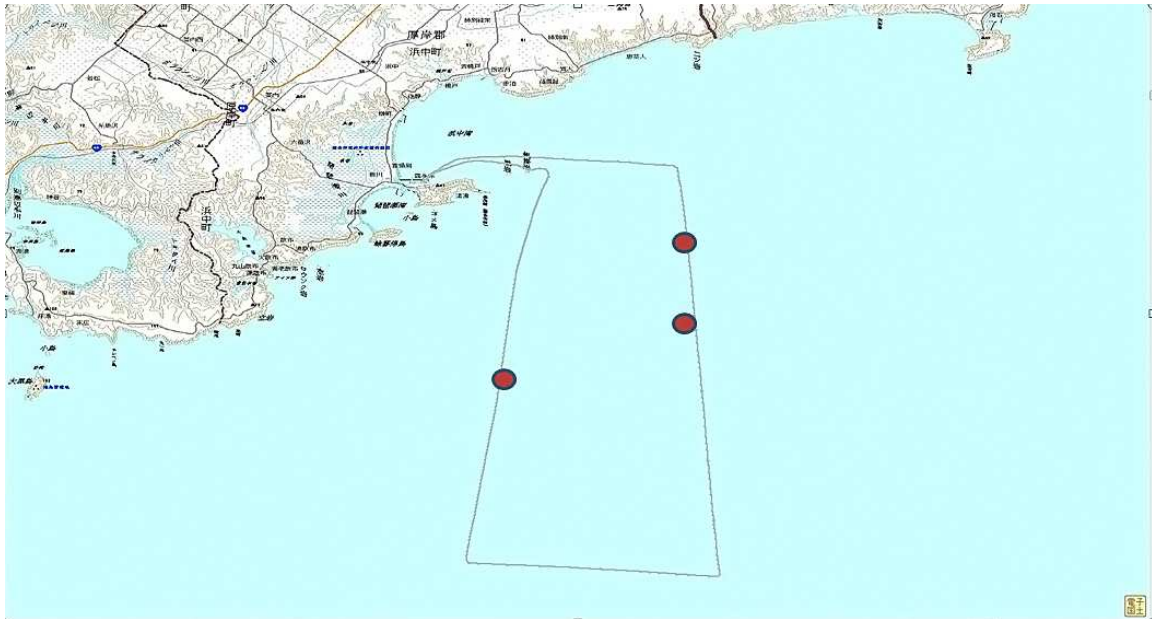


図 8. 2015 年 7 月 9 日ならびに 28 日の霧多布海域におけるツノメドリ出現位置

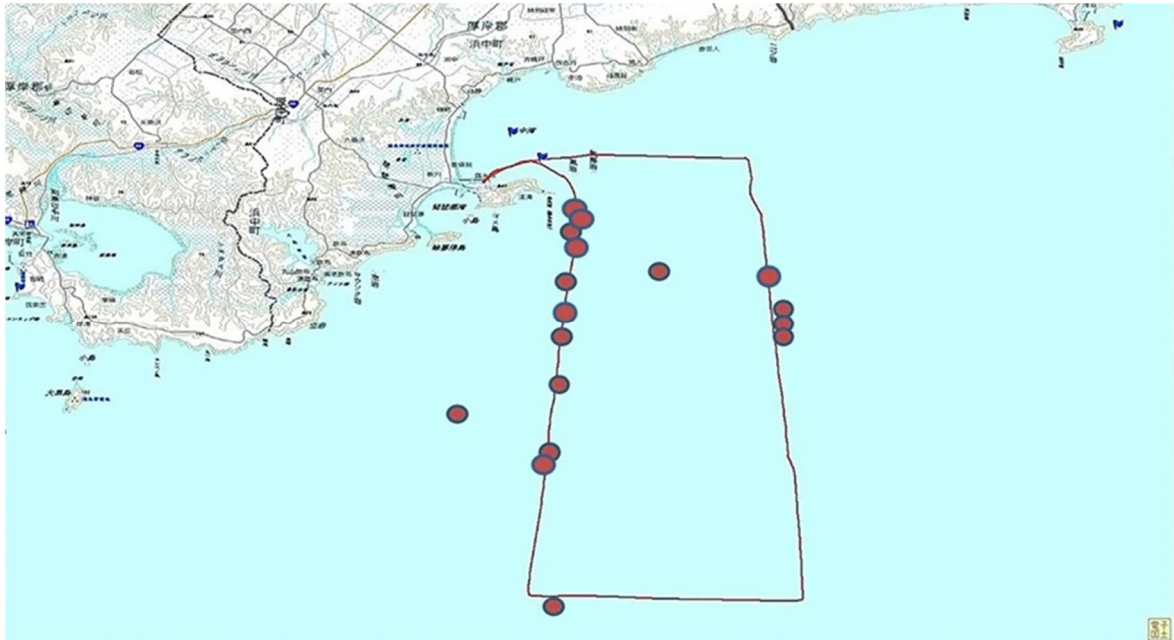


図 9. 2011～14 年の霧多布海域におけるツノメドリ出現位置
NPO 法人エトピリカ基金調査によるもの

②カンムリウミスズメ

本種は冬期から春期に日本列島周辺の黒潮・対馬暖流域で繁殖し、繁殖地を離れた後の分布は長い間、謎に包まれていた。2010 年前後から当基金や NPO 法人日本野鳥の会十勝支部の調査により 7～10 月の北海道東部の太平洋沖合に少なからぬ数が定期的に渡来していることが明らかとなった。分布上の特徴として、水深 40m 以深、陸岸から 10km 以上の海域に多いため、これまで気付かれていなかったと思われる。

本調査では 3 回すべてで 2～4 羽が記録された。分布はやはり外洋性で、特に水深 60～80m、陸岸から 15～35km の距離で記録された（表 9 ならびに 10、図 10）。

ただし、1 回あたりの確認数は過去に 10～20 羽以上がたびたび観察されていることを考えると少なめであった。本年度の当海域への来遊数が少なかった可能性があるが、一方では 7 月 30 日に根室半島南岸では 70 羽以上が記録されている（当基金の調査）。非繁殖期における本種の採餌行動や食性、集群性などについてはほとんどわかっておらず、分布について考察するには、それらに関する情報の集積が必要といえる。

また、6 月 8 日にも 2 羽確認された（写真 10、11）が、少なくとも 2012 年までは本種が道東太平洋に到達するのは 7 月上旬であった。しかし、2014 年 5 月下旬には十勝沖で 1 羽が観察される（NPO 法人日本野鳥の会十勝支部）など渡来時期の早期化を伺わせる記録が出てきている。本調査における 6 月の記録はいずれも単独個体であり、繁殖に失敗した、あるいは非繁殖個体が早めに北の海域に到達した可能性もあるが、暖水塊の存在をはじめ、洋上分布の詳細を明らかにするには、海水温や海流、クロロフィル濃度等更なる海洋学的情報の収集・解析が必要である。

表9. 本調査における水深ごとのカンムリウミスズメ確認数

水深(m)	確認数(%)
	(N=10)
60-80	5(50.0)
80-100	2(20.0)
100-120	2(20.0)
200-	1(10.0)

表10. 本調査における陸からの距離ごとのカンムリウミスズメ確認数

陸からの距離 (km)	確認数(%)
	(N=10)
15-20	2(20.0)
20-25	3(30.0)
25-30	2(20.0)
30-35	2(20.0)
35-40	0
40-45	1(10.0)

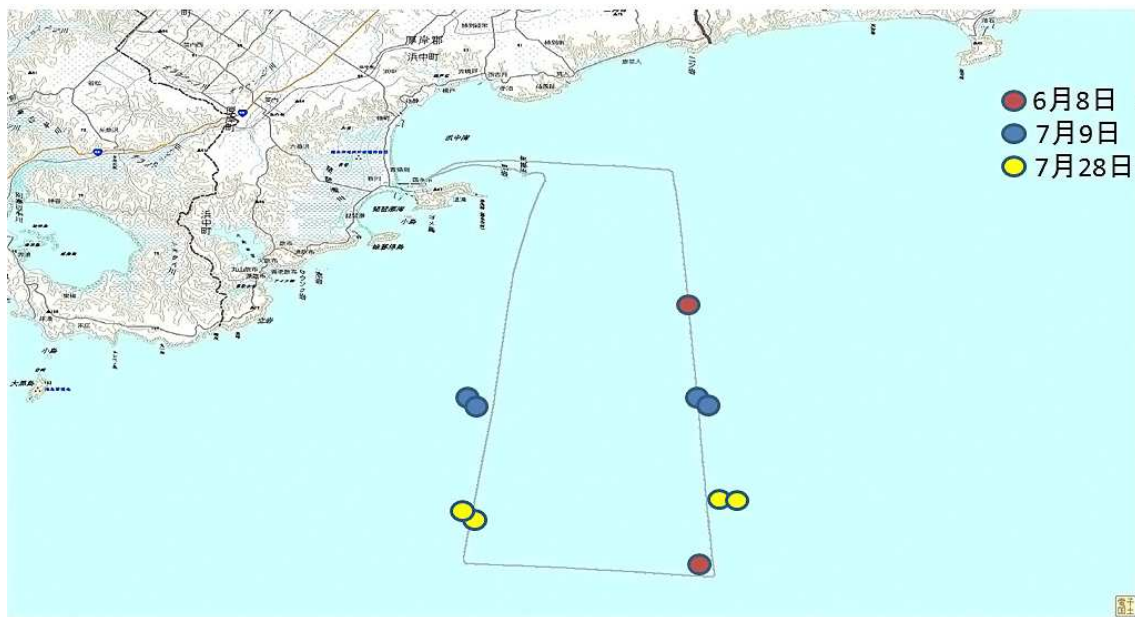


図 10. 2015 年 6～7 月の霧多布海域におけるカムリウミスズメの確認位置

③その他のウミスズメ科鳥類

ハシブトウミガラスが 6 月 8 日に 21 羽、7 月 9 日に 9 羽確認された、本種は冬鳥であるが、5 月中旬頃までは普通に残っており、これらは非繁殖鳥か高緯度地域で遅い時期に繁殖する個体であろう。7 月 28 日には観察されなかったが、海水温の上昇にともなって北上したのかもしれない。

ウミガラスを 6 月 8 日に 2 羽、7 月 9 日に 5 羽観察した。前者はウトウ、エトピリカ各 1 羽とともに浜中湾北岸を飛翔していた。長距離移動という雰囲気ではなかったので、採餌効率向上のために混群を形成していたのかもしれない。本種の道東太平洋における繁殖は 1980 年代初頭に途絶えているが、歯舞群島では現在も繁殖しており、そこからの飛来もしくは非繁殖鳥と思われる個体が夏の間も観察され、落石海域では巣立ち後の半早成性のヒナをともなった親子も観察されている。

ケイマフリは 6 月 8 日に 5 羽、7 月 28 日に 1 羽を観察した。浜中町内でも小島や涙岬周辺で繁殖している。

ウミスズメは 6 月 8 日に 34 羽、7 月 9 日に 8 羽が観察された。根室市ハボマイモシリ島で巣卵の発見された事例があり、南千島でも繁殖している。当海域でも幼いヒナを連れた家族群が何度も観察されている。ただし、その数は少なく、見られない年もあることから、本調査で観察されたものの一部は非繁殖鳥や高緯度地域で繁殖する渡りの遅い鳥も含まれていると考えるのが妥当であろう。

エトロフウミスズメ 3 羽が 6 月 8 日に観察された。本種は中部千島以北で繁殖し、冬もあまり南下しないで流水縁や湧昇域に集群する。2～3 月が渡来の盛期で 4 月上旬には渡去

するのが一般的だが、当海域では6、7月に少数、それも嘴色の鮮やかさから繁殖齢に達していると思われる鳥が観察されることがある。これらがその年には繁殖しないのか、繁殖地から餌を探しにやって来るのか、高緯度地域で繁殖するため遅い時期まで残留しているのかは現時点ではまったく不明である。

ウトウは6月8日に255羽、7月9日に102羽、同28日に79羽を確認した。ウミスズメ科の中では最優占種であるが、2012年頃まで見られた数千羽規模の大群はこの2、3年観察されていない。しばしば同所的に観察されたハイイロミズナギドリの大群も、この数年観察されていない。時を同じくして、厚岸町大黒島や日本海側の天売島では繁殖成功の著しい低下が指摘されている。その一方で、礼文島の北にあるトド島や青森県周辺の島嶼では分布や数の増加が知られている。本種の洋上分布の増減を明らかにするためには、北西太平洋といった大スケールから浜中町沿岸といった局地スケールまでの海洋環境の変動を明らかにする必要がある。浜中町沿岸におけるウトウの洋上分布に関する特性とその季節・年変動については、2016年度に解析を行う予定である。

(6) ウミスズメ科以外の鳥類と海獣類について

ウミスズメ科以外の鳥類の出現種とその数については、表2に示した通りである。本年度は出航回数が少なく、得られたデータも少ないため、それぞれの科・種の分布やその季節・年変動に関しては、当基金が過去に実施してきた調査データ、ならびに2016年に予定している調査で得られた結果をもとに2017年度以降に詳細な解析を行う予定である。

表11. 日別の海獣類などの確認数					
No.	科名	種名／月日	6	7	
			8	9	28
1	ナガスクジラ	ミンククジラ	1/1		
2	ネズミイルカ	イシイルカ	1/1	3/18	
3	アシカ	キタオットセイ	3	1	3
4	アザラシ	ゼニガタアザラシ	46	13	18
5	マンボウ	マンボウ		2	5
*鯨類の/の左側は群れ数で右側は個体数					

海獣類やマンボウなどの大型魚類の確認状況を表11に示した。前年度に比べると全体的に少なく、5科5種が確認されたのみであった。最も個体数の多いゼニガタアザラシについては、「海獣繁殖調

査」の項で詳述したので、本稿では割愛する。キタオットセイは毎回観察されたが、1～3頭と少なく、いずれも小型であったことから、性成熟前の若い個体が滞留していたと思われる。イシイルカが7月28日をのぞく2回で、計4群19頭が観察された。発見位置はいずれも水深60～120m、陸岸から20～35kmの外洋域であった(図11)。この傾向は前年度とも一致しており、本種は一定以上の外洋域に生息し、主に夜間に鉛直移動で表層付近に浮上して来るイカ類やハダカイワシ類などの中・深層性魚介類を捕食するものと考えられる。カジカ科、タウエガジ科魚類、ハタハタなど沿岸底層性魚類を捕食するネズミイルカとの空間的な隔離は前年度の調査からも明白であり(図12)、興味深い課題といえる。

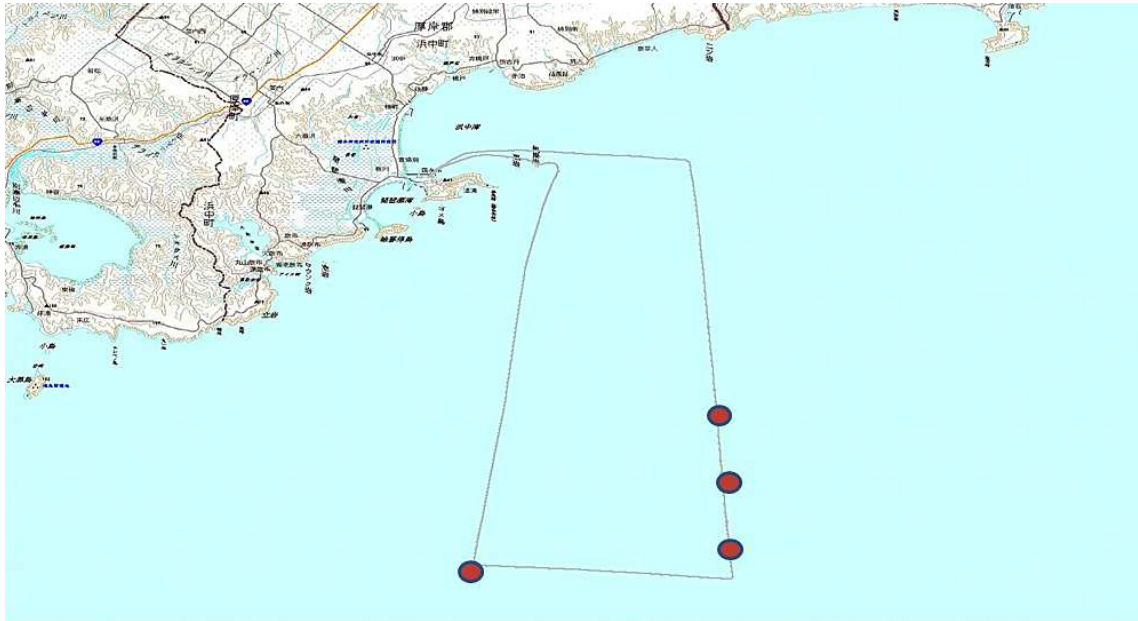


図 11. 2015 年 6、7 月の霧多布沖におけるイシイルカの確認位置

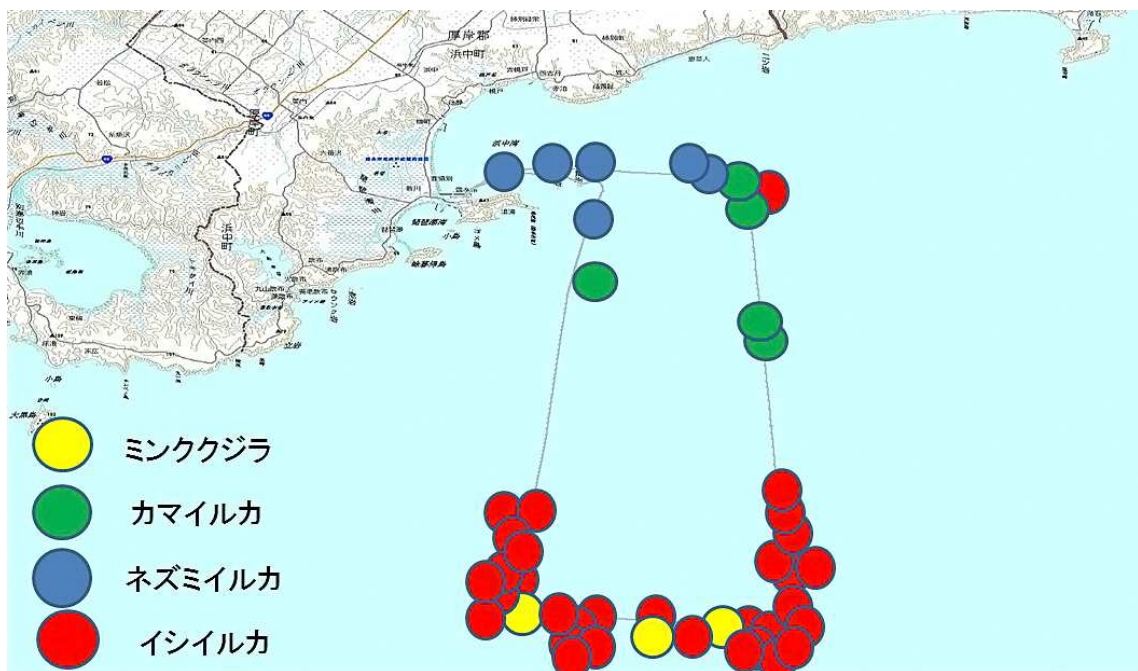


図 12. 2014 年度調査の霧多布沖における鯨類 4 種の確認位置

4) まとめ

2015 年 6 月 8 日、7 月 9 日ならびに同 28 日に浜中町霧多布の沖合約 35km までの範囲で、小型船を用いた海鳥個体数調査を実施した。14 科 31 種の鳥類、不明カテゴリも含むと 42 項目、合計 6295 羽の鳥類が記録され、その中には 10 種の貴重種が含まれていた。

最優占種は 6 月がフルマカモメ、7 月 9 日がハイイロミズナギドリ、同 28 日がアカエリヒレアシシギで、フルマカモメは 3 回すべて、ウミネコは前 2 回で優占種の上位 5 種に入った。ヒレアシシギ 2 種は 7 月の 2 回の調査で優占種の上位に位置し、集群性の強い渡りのピークと同期したと思われる。フルマカモメの卓越ならびに同淡色型の高い比率は前年度の調査と異なり、これについて冷水塊と暖水塊間の水温勾配など海洋条件と関連した若干の考察を行った。暖水塊の北上は例年より早いクロアシアホウドリやカンムリウミスズメの出現とも関連があったかもしれないが、海鳥の数や分布と海洋環境の関連の詳細を明らかにするには、更なるデータの集積が必要である。

エトピリカは各調査で 1 羽、成鳥が沿岸域で出現したのみで、今年度の分布様式を要約すると、①海域全体への飛来数自体が著しく少なく、②数少ない飛来は成鳥による沿岸域へのもので、③通常この時期に多く出現する沖合の若鳥がまったく確認されなかった、の 3 点に集約された。若鳥の不在について、昨年の沿岸域における通常と異なる分布と絡めて議論した。ただし、個体群動態や分布の詳細を明らかにするためには、一大繁殖地の千島列島も視野に入れた広域モニタリングの実施と継続が必要である。近縁種のツノメドリは昨年より少なかったものの、若鳥がやや沿岸に出現するパターンはこれまでと大差なく、繁殖地がより北に位置するため、昨年の環境条件の影響をエトピリカほど受けなかったのかもしれない。

写真（その1）



写真1 第八栄徳丸(6/8)



写真2 調査風景(7/11)



写真3 北側から望む霧多布島(7/11)



写真4 南側からの湯沸岬(7/11)



写真5 エトピリカ(左端)とウミガラス(6/8)



写真6 エトピリカ(6/8)



写真7 ハシブトウミガラス(6/8)



写真8 ハシブトウミガラスと海岸線(6/8)

写真（その2）



写真9 ウミスズメ(6/8)



写真10 カンムリウミスズメ(7/28)



写真11 カンムリウミスズメ(7/28)



写真12 カンムリウミスズメ(7/9)



写真13 エトロフウミスズメ(6/8)



写真14 エトロフウミスズメ(6/8)



写真15 ウトウ(7/9)



写真16 ウトウ(7/9)

写真（その3）



写真17 ウトウ飛翔(6/8)



写真18 コアホウドリ(7/28)



写真19 コアホウドリ飛翔(7/28)



写真20 クロアシアホウドリ飛翔(6/8)



写真21 クロアシアホウドリ飛翔(7/28)



写真22 クロアシアホウドリ幼鳥飛翔(7/28)



写真23 海上のコアホウドリとフルマカモメ暗色型(7/9)



写真24 フルマカモメ暗色型(6/9)

写真（その4）



写真25 フルマカモメ暗色型飛翔(6/8)



写真26 フルマカモメ暗色型飛翔(7/9)



写真27 フルマカモメ暗色型飛翔(7/9)



写真28 フルマカモメ淡色型飛翔(7/9)



写真29 オオミズナギドリ飛翔(7/28)



写真30 クロトウゾクカモメ飛翔(6/8)



写真31 アカエリヒレアシシギ(7/28)



写真32 ハイイロヒレアシシギ(7/28)

写真（その5）



写真33 ハイロヒレアシギ小群飛翔(6/8)



写真34 キタオットセイ(7/28)